トラウンキルヘン　トラウン湖の右岸に「トラウンキルヘン」といふ町がある。風光明媚な湖を控へたこゝは避暑地として有名で老後を靜かに養ふ人々にとつてこゝの靜けさに餘生を樂しませる。一入靜けさを增す秋の血に燃えやうな高地特有の紅葉も程近い。

トラウン湖上の城　トラウンスタイン山の下に美しい水を湛へてゐるトラウン湖には木の橋をわたした町の城砦が今も殘つてゐる。それは中世紀の頃この湖畔にあるグムデンの守りとして建てられたもの。そしてカストナヒハンサルトアウルの大公の居城もつたつ。

底に積つた介殼蟲の遺體の塊である。從つて幾千萬年の間、雨水、河流に洗はれて、腐蝕崩潰して突兀たる奇峰に富むわけであつて、いはゞこれら湖沼の水が、アルプスにその奇と勝とを與へてゐる次第で、反對にまた、水は山を得て、この憂鬱雄大な美を得てゐる次第である。

湖の最大なのはアッターと呼ばれるが、それらのうち最も美はしい女王は、山の王者トラウンスタインの下にひろがる、トラウン湖であらう。湖の水が、トラウン河に流出する口には、有名な避暑地グムンデンがある。王族の別荘も一二に止まらぬ。河を下ればトラウン瀑の勝がある。鹽舟と呼ばれる小舟に乘つて矢のやうに河を下れば、瀑布の個所には別に運河を通じて觀瀑の歡を盡しつゝ危險なく下方の陸に上陸することができる。湖から更に上流に遡れば、溫泉と避暑の勝地イシュルがある。盛夏の季節には貴紳上流の人士の群り集るところである。町の近くなる鹽の山に地下の神祕を探るのもまた興あることであらう。鹽坑は十二の鹽の部屋から成つてゐて、先づ淡水を充たすこと數週、飽和した鹽水は、

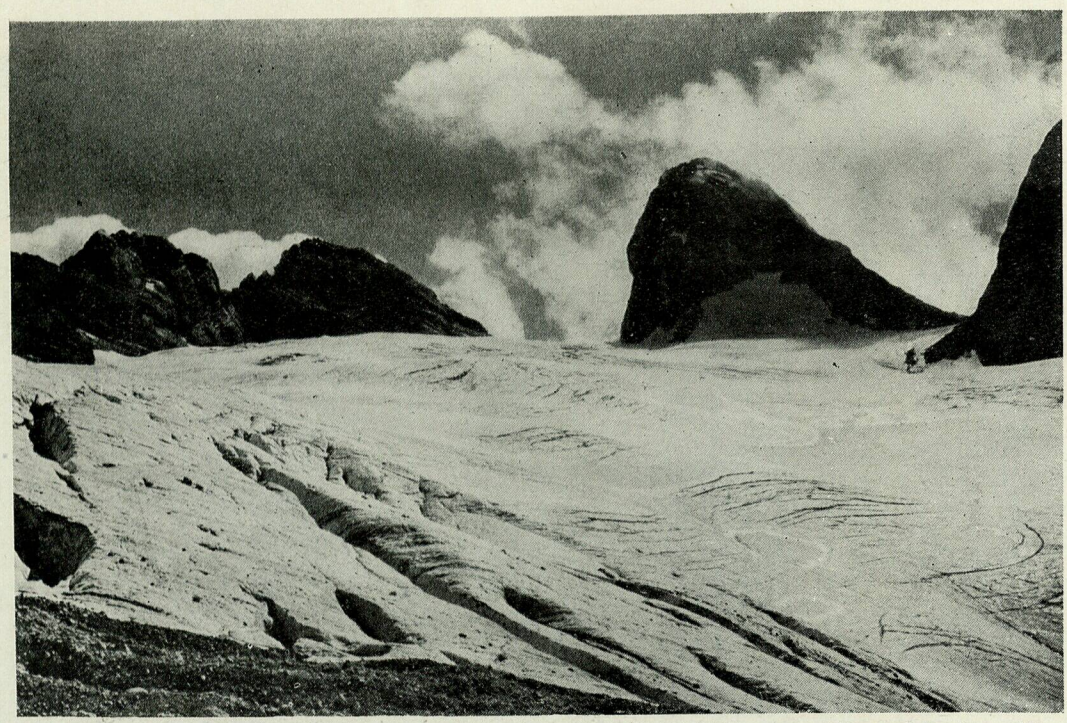
スプイ地勝　下オーストリアのヤリトスプイ流支のウナドの岸河スプイ町は古くから景勝地として知られてゐる。ここは人口五千約は四〇キロ西のシテルペ・トクンザにあつてゐる。

イシュルの町に導かれて、煮つめて鹽を採るのである。

案内者に導かれて支柱に堅められた坑道を進めば、やがて鹽水の地下の湖が足下にひろがり、燭火の光りに怪しい陰影を落す。小舟でそれを渡ると、やがてまた今度は廣濶とした鹽の部屋に達する。指し示される岩鹽の洞は、燈の光に逢うて虹霓のやうな奇しい色に輝いてゐる。今度は坑車に乘つて矢のやうに走り出すと、やがて前方に針で突いたやう光の點が見え、間もなく再び白晝の光の中にわれ〳〵は運び出される。

溫泉場ガスタイン

しかし、ザルツブルグをめぐる避暑地の王は、ガスタインの溫泉場であらう。これにはトラウンの湖へとはまた別な鐵路の便を藉らねばならない。ガスタインの溫泉の効能は、既に中世以來世に喧傳せられてゐた。神經性病症や老衰に特効あるばかりでなく、痿え凋んだ草花をさへ再び生々させるこの無色單純な湯の力は、長く化學者連の問題となつてゐた。しかし、この溫泉が、殆ど世界一のラディューム含有量を有することを知つたわれ〳〵にとつては、それは何の不可思議でもない。この天然の美と靈泉の效とに惠まれた溫泉場はまた、老境に入つた大政治家連の靜養地として、從つてまた政治的握手や陰謀の策源地としても有名であつた。一八六五年、シュレスウィヒ、ホルスタイン問題に關した條約會議に、ビスマルクが辣腕を揮つたのもこの地であつた、



ダッハシュタインの雪　ラトウンガ河に沿ひ温泉地帯で有名なルユシイ地方の一部に近接して二十の坑道がある。ルユシイはダッハシュタインの南にあるアルプス山脈の一部で、山容は相當に険しく、山頂は雪で覆はれてゐる。

ガスタイン山　第十九世紀の外交史上で高名な温泉ガスタインは、ラドゥムウィデラ温泉と共に世界一の含有量を誇る。温泉場の設備は完全で立派なものである。そのすぐ近くの美しい山々の姿は、後に温泉場を囲んでいる。寫眞は、ガスタインの郊外の景色である。

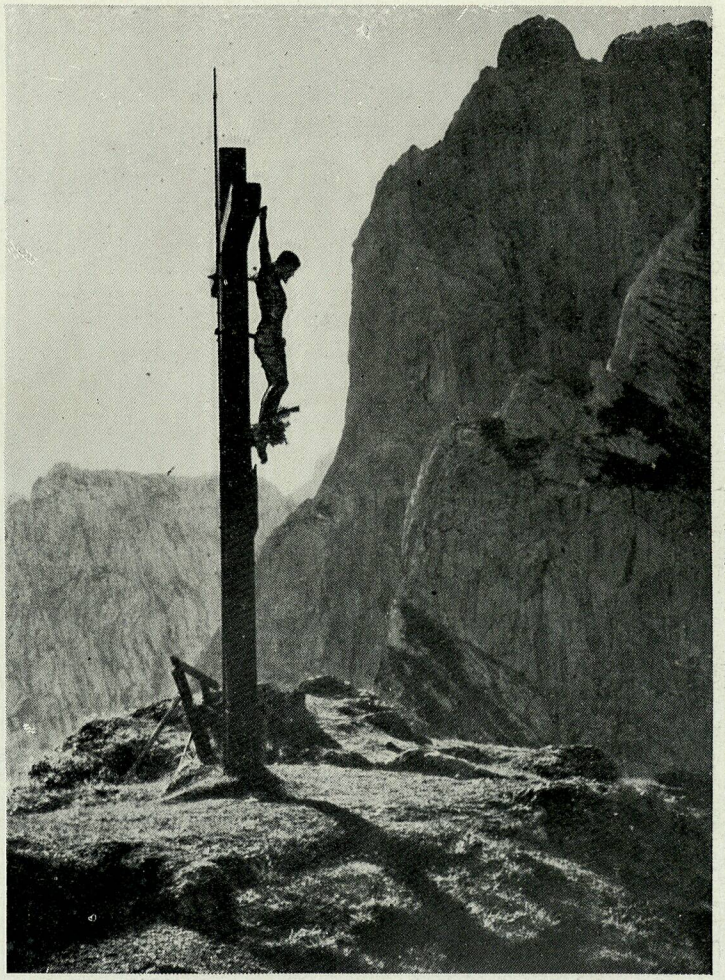
ティロル

ザルツブルグから更に西すればティロルの地、スウィスと共に歐洲の否世界の名所である。ティロル・アルプスの稀薄な高山の空氣が齎す美はしさ純眞さは、單にその雄大無比な風景にばかりでなく、羽毛で飾つた帽子をかぶり、鹿角のボタンに膝までの皮ズボンをつけた、ティロル農民の眞情質朴の性質にも現はれてゐる。一般にカトリック教を信ずること厚く、山地の民の常として迷信的な點もあるが、剛毅正直、人に對しては鄭重、己れに對しては眞面目で、同時にまた自然の熱血兒が多い。音樂を聽いてゐる間に急に激しい喧嘩亂鬪の修羅場を演ずることもある。祭りには急調な激しい舞踏に狂ふまで踊りぬく。弱いのと上品なので有名なオーストリヤ軍隊の中で、ティロルその他のアルプスの獵兵のみは、英雄ナポレオンをさへ敢て恐れなかつた勇敢さをもつて鳴つてゐる。

インスブルック

このティロルの首府は卽ちインスブルック、幾百の氷河の水を運ぶ灰白の急流インの流れに沿うて、町の上には深雪の筋目に飾られたアルプスの山端が蔓を壓してかこんでゐる。町はこのあたりインの谷々の散らばる村々の集散の中心地「使ひの日」と呼ばれる日卽ち火曜または金曜日に舊市街の產業區を歩くと、われわれは道の側らに、箱籠それぞれに滿載した荷馬車が列をなして、谷々村々の使ひ人なる親方が、忙しく村人から賴まれた賣捌き仕入れの仕事に立ちまはるのを見るであらう。仕事が終ればかれ等は近くの酒店に集まつて、方言賑かに生々とティロルの葡萄酒の杯を擧げるのである。

インの町はこのやうに今もなほ生々とした活動の町ではあるが、同時にまた傳統の香り高い觀物にも富んでゐる。そこに立並ぶ居酒屋さへも、昔からここを過ぎつてレモン花咲くイタリヤへと、ブレンナーの峠を越えて行つた、數々の名士等の名前と結びついてゐる。ザルツブルグに生れた文學者のパラセルスス、フランスの哲學者モンテイニュも早くこの地の美を稱へ、酒店「金色の鷲」には、今もなほゲーテの室が保存せられてゐる。

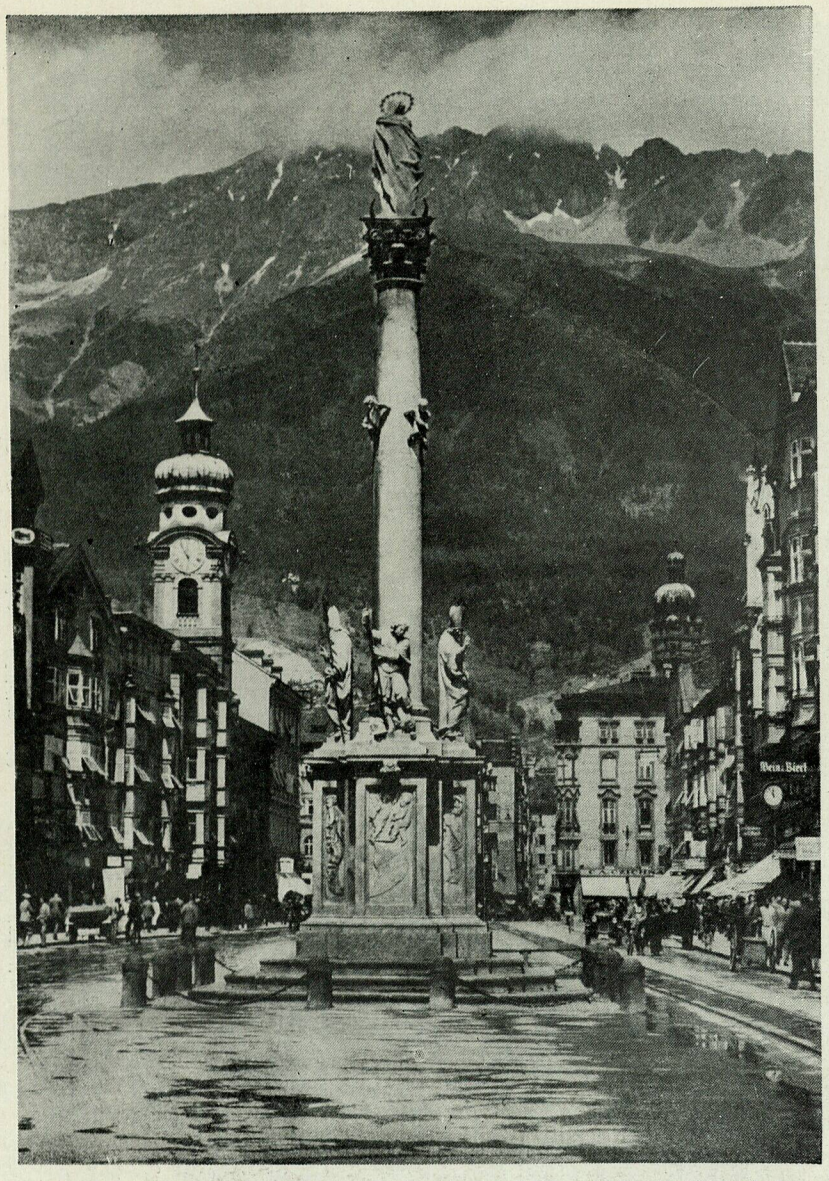


ティロルの勝地 ティロルの景勝はスイウスにもとれそのに世界に高名な高崇な感を起せる。ティロルの中にもで優秀な地臺ーザイカ一の「十」字架。人が立てし高い山の氣

マキシミリヤンとホーファー

しかしインスブルックの人の最も敬愛する市の守護神は、ドイツ帝マキシミリヤン一世と、アンドレヤス・ホーファーである。「騎士の最後の花」と呼ばれた皇帝は、この地からドイツ帝國全體を支配した。そしてその墓は、今もなほここの宮廷寺院の中に先祖及び同時代の歐洲諸帝王の像に守られて、安置せられてゐる。

ホーファーはティロル農民の花、ナポレオンがこの地を攻略するや、かれは歐洲大國の帝王さへ憚服したこの英將をば、烏合の農民を率ゐて、自由のために幾度か惱ました。かれの古戰場たる町の南郊イーゼル丘には、かれの記念像が、今もなほティロル市民の尊敬を集めて立つてゐる。



マリヤ・テレジヤ通り マリヤ・テレジヤ通りはインスブルックの中心である。その通りの中央に立つ聖アンナの記念柱は一七〇六年の建造にかゝる。崇高な山相に相しいこの町の歴史を代表してゐる。

マリヤ・テレジヤ街

中央に聖アンナの記念柱の立つマリヤテレジヤ街は町の中心地、その端れに女帝のために建てられた凱旋門が立つてゐる。通りの池の端は舊市街の中心街フリードリッヒ街に連續し、そのつき當りには市の第一の名物、「金の小屋根」が輝いてゐる。これは鍍金した銅で葺いた張出窓「空財布公」フリードリッヒが、五百年ほど前に建てた王城の後身で、今は市有となつてゐる。舊市街に隣るインの右岸の一角は、王城、宮廷、寺院、大學、美術館、劇場等の占める政治文化の中心地、手入の屆いた宮廷公園に沿ふレンウェーグの大路の清々しさにも、この町の特色は現はれてゐる。

インを渡つて左岸、道を高み

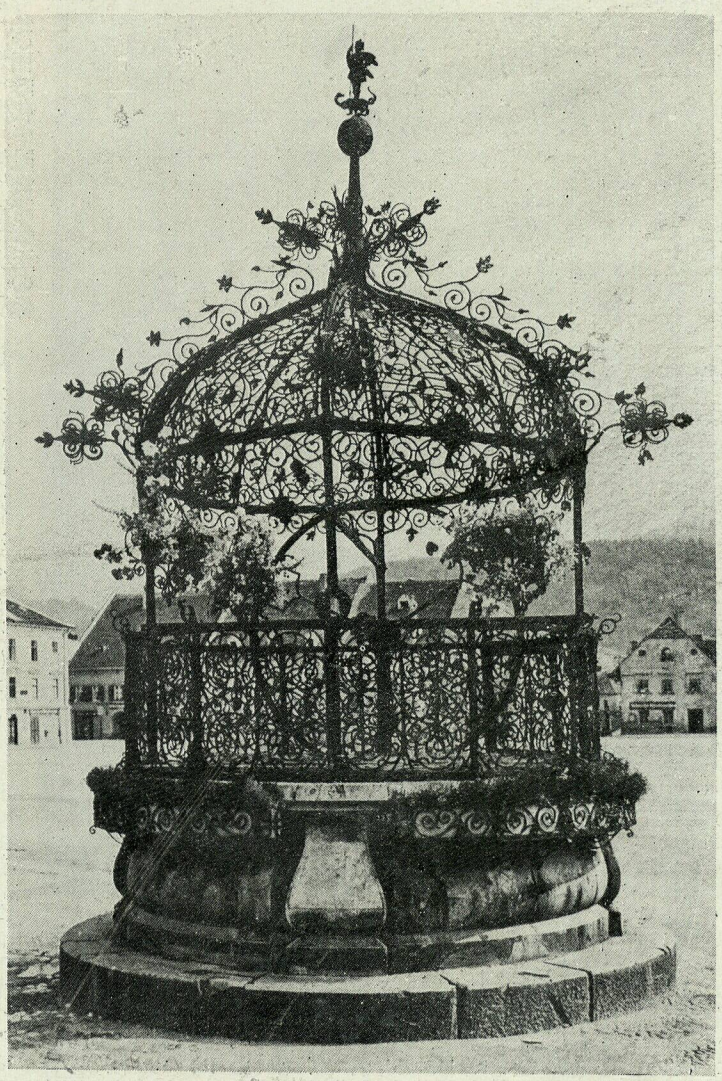
にとつて行くと五月の陽ざしの下に小鳥が鳴き、牧場には受難像の道しるべの下に、忘れな草が可憐な花をつけてゐる。やがてフンガーブルグの眺望臺に立つて、ノルドケッテ(北方の鎖)カルクコーゲルの雪白い山山を密雲の上に仰ぎ、足下に六萬五千の人口あるこの愛すべき町を俯觀したときの印象は、今もなほ生々としてゐる。インスブルックより南にブレンナーを越ゆれば愛すべく同時に活氣あるボーツェン(ボルツァノ)の町、ティロルの舊都メランの町がある。しかもこれ等の町々、アンドレヤ・ホーファーの故郷なる町は、今ブレンナー峠と共に、言語も風俗も異にするイタ峠リヤの治下に置かれてしまつてゐる。

グラーツへ

センメリング

グラーツへの旅は、ウィーンから急行四時間の旅、路程の大半、ブルックまでは、ウィーン・ヴェニスのイタリヤ行き、幹線を利用する。ウィーン南停車場を出て、二時間餘で、センメリングの峠を越える。この道は百餘年前までは、ブレンナー・タウエルンと共に、東部アルプスへの唯一の通路であつたもの。この部分の鐵道は山地鐵道の最初の例として、當時世界の視聽を動かしたものである。

松柏生ひ茂る谷を廻り、絶え間なく山を穿つて、道は約九〇〇メートルのセンメリングにつく。雪の山、地獄谷の山々にかこまれたこの高地は、數多くの別莊旅館に、ウィーン人が避暑及び冬の遊びの歡樂場をなしてゐる。峠を越えればミュルツの河が鐵路に沿うて下り、ムールの谷に會するところでブルックに着く。ブルックから右に進めば、ヴィラッハを經て路はイタリヤ領に入り、水の都ヴェニスに達し、左すれば間もなくして、グラーツの町に達するのである。

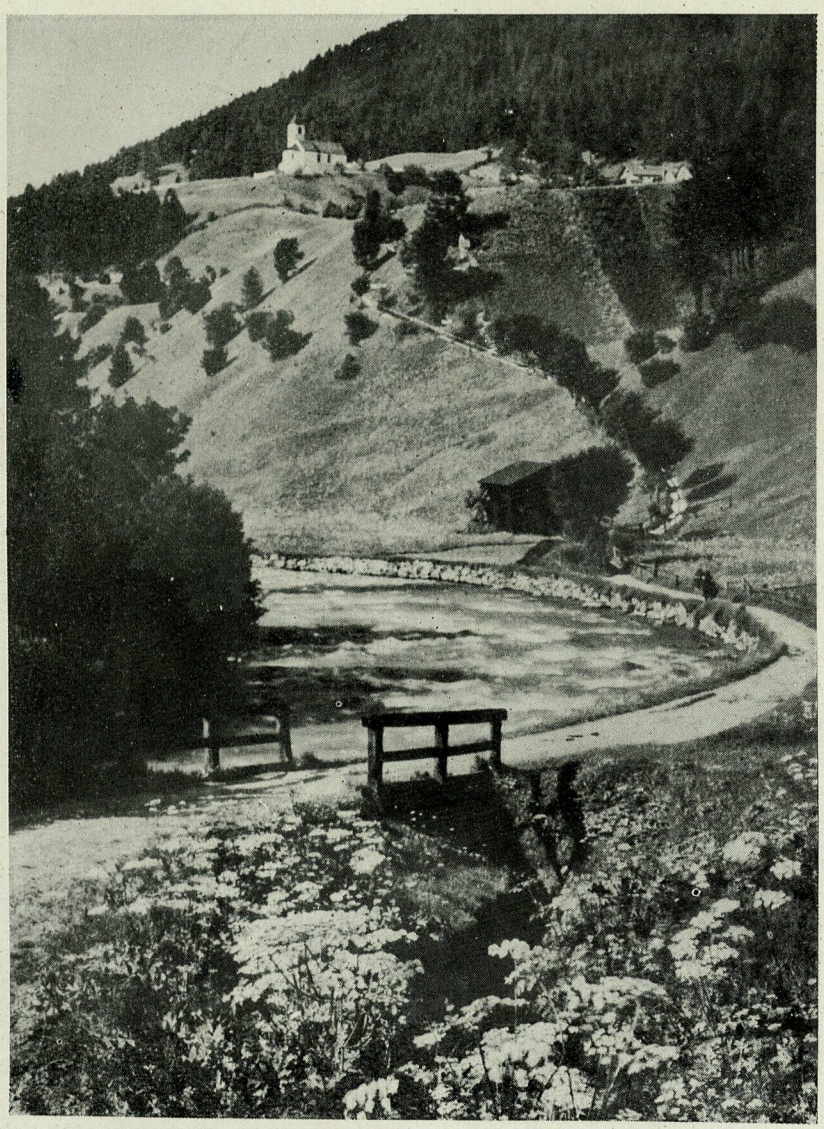


中世紀の井戸　ウィーンからグラーツへの道筋の町ブルックを訪れた中世紀の井戸はのもたれ見るやうなあの井戸にのるあの氣附くやうに、この井戸の蓋は銅黃で覆はれてゐる。

グラーツ

グラーツは舊スタイヤーマルク公領の首府、人口十五萬餘のドイツ人の町である。七つの橋あるムールの兩岸に跨り、大學、高等工業學校をもつて、また機械、製紙製革、及び酒造工業をもつて、この人口密なる

ムールの谷の精神上産業上の中心地、東アルプス第一の都會であるが、しかしこの町の特色は何よりも先づ〝美しい環境と安樂な生活に惠まれた平和な町であること、恩給生活に入つた官吏軍人などの、好んで住む安住地であることであらう。



ブレーナンーの越え オーストリヤからイタリヤにかけて行く峠にブレーナンーがあるが、今は車賃で眠つてゐる間に越えられる。寫眞ブレーナンーの峠の舊街道と道きべふいもとはれこの道はイタスナンイツ附の物の近所風たびさあで景風るる。

ケプレルの遺跡

停車場から右岸の新市街を貫くアンネレ通を進んで左岸に渡れば、そこが卽ち舊城内、ハウプト・プラッツがその中心の廣場である。廣場の中央は群像に飾られた泉水に鎭められ、南にはルネッサンス樣式の美しい市議事堂が立つてゐる。議事堂を曲れば、ヘレン・ガッセ、この町第一の繁華の通りで、道に沿うて第十六世紀にできた前議事堂が立つてゐる。門を入れば柱廊にかこまれた美しい中庭の一隅に、純ルネッサンス式の井戸が黃銅の精巧な天蓋風の屋根に覆はれてをり、側らには嘗てここで六年の間數學の教師をした、ケプレルの記念碑が壁に張つてある。

謂はゆる「ケプレルの法則」の發見者、またコペルニクスとともに地動說を主張して、これに機械的自然的說明を與へ得たこの近世自然科學の創始者の遺跡を、このアルプスの山中に見出さうと誰が思ふであらう。人の世の運命は、まことに數奇に充ちてゐる。

本寺・市立公園

城内區の東寄りのフランツェン廣場の東には、第十五世紀からの王宮が、南にはこれまた第十五世紀にでき上つた、後期ゴシックの本寺が立つてゐる。同時代の壁畫、裝飾等見るべきものが多い。この一劃の背後を長方形に取圍んで、ひろ〳〵とした

市立公園がある。

緑の樹立にかこまれて、夏雲の空に條々の銀絲を滴らしてゐる美はしい噴泉を中心に、そこここには、民衆の崇拜を集めてゐる數々の名士の像を配置した樹影の多い公園、園内のカフェーから快く響いてくる軍樂隊の樂の音も、伸びやかな初夏の午後にふさはしい。園の南の端には市立歌劇場が立つてゐる。この町は、現代ワグナー派の者宿、キェンツェルや、現今最大の指揮者の一人、ワインガルトナー等の生れ故郷であつて、音樂に緣の深い藝術の町である。

グラーツの中央廣場　シュロッスベルグは計時大のグルベスツロユ目の標とつなと下のそ。るゐてつなゐる。そのの場廣の東側にはエリツグといふ第七十世紀世出の來四の阿が建つてゐる。

中央廣場があるる。

シュロッス・ベルグ

グラーツ第一の目標は、しかし、五千メートルの高き天空に、町を威壓する城山であらう。城は往昔のスタイヤー侯の古城地であるが、第十五世紀以來、トルコ人の來襲を防ぐためにここに砦が設けられ、ナポレオン戰役には、フランスの大軍を前に、よく籠城の功を奏したところである。今は砦は取毀されて、市民のための公園となつてゐる。

絶壁に九十九折なして疊まれた石階をよぢ上れば、これはまた古風な大時計臺の下に出る。將棋の駒のやうな屋根の下に張出しの室をしつらへ、その下の角塔狀壁間には全市から歴々と見得るやうな文字板の時計が作りつけられてある。側らのトルコの泉は、深さ凡そ八五メートル、籠城に備へた水源ででもあらう。山上更に三〇メートル餘の高さある鐘樓に上れば、實りよきムールの谷、四邊の美はしい山々は手にとるやうである。空の際には、雪聖きアルプスの山波が、長城のやうに四周を固めてゐる。グラーツより南すれば、ユーゴ・スラヴィヤ國境ライバッハを越えて、トリエスト、フューメのアドリヤの海港に達する。西すれば間もなく、新國境を越えてハンガリヤに入り、ブダ・ペストに達するのである。

（村松恒一郎）

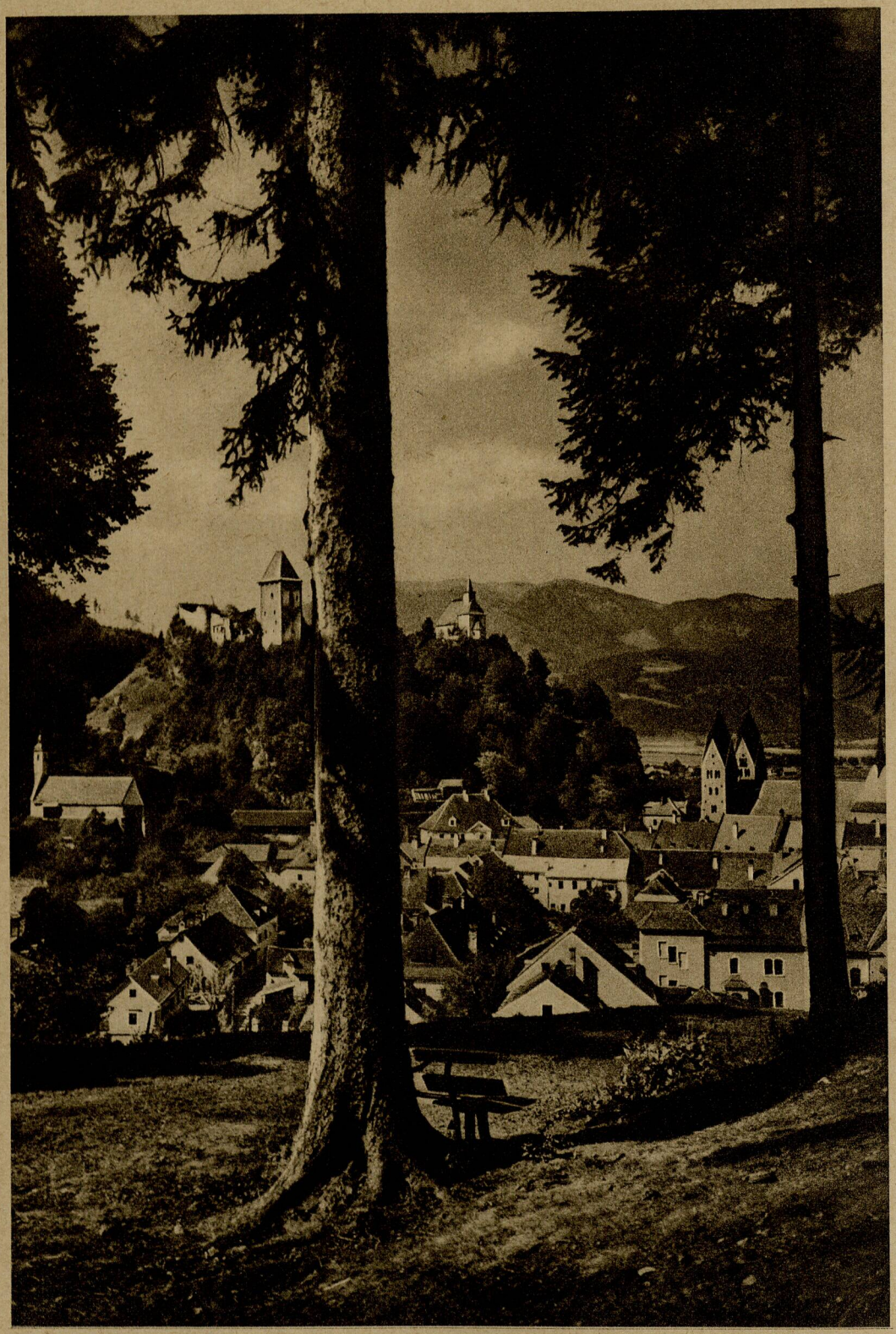
雪の野路　ドイツの山地や中歐諸國の辟村を旅するとゐたいとろす旅を村辟の國諸歐中地山のツイ

ほに時や人老ろ祈きづ額に前のそも今でのもろ語にらがなさを史歴の仰信教宗の古往るけおに方地のこはれこ。ろ見を祠たびさ神なうなやこに所るたいとろす旅を村辟の國諸歐中地山のツイ

。るせか抱をじ感たれ枯らういし淋もにかいは姿の祠つ立と然悄に中の原野の雪く行とくさくさてうこ沿にとあの幕く續とぬうねう。ろあ近附トンモドアのヤリトスーオたれ埋に雪は眞寫。ろ見を幌い若

高地の寺町　オーストリヤの南邊ハルト市にある古風な寺である。ゴシック式の鋭い屋根に四角な蹴躓が付けられてゐる。テンザビにれこてれらけつりとが

ィンの風の帽子屋根が乗せてあるものこの地方らしい氣分をもたせる。こなたの家のそのらか店たいぞもしる中世風の古雅な面白いものである。



フリーザハツの風光　クラゲンフルトの北北東約三十七キロにあるフリーザハツの町。こゝは人口約二千の小さい町であるがなほ今往古の城壁や城砦が殘つてゐて懷古的情調がたゞよつてゐる。遠き山々近き森々。その中に集つた赤い屋根と白壁。そして丘に聳ゆる古城。

積藁の前にて　ハンガリヤ人の服裝は他のヨーロッパ人のそれに較べて一風變つたものである。殊に農夫の盛裝は日本の昔の陣羽織に似たやうなものを着る。この寫眞の農夫たちの着衣のごときもそれである。トルコ帽に似た毛帽に飾釦の多い服は大禮服のやうに物々しい。

若き母と子　清淨な雪白のシヨールの一絲みだれず撫でつけた若き母親の頭髪。そしてあゝ坊ちやんのレースの帽子と着物。「さあ支度が出來ましたよ」と言はんばかりの愛情深き母の表情。ハンガリヤ婦人の典型的な風俗の晴れの衣裳。長閑な日ざしが和やかに微笑む。

朝の酒倉　酒倉の朝。靜かに柔かい日ざしがしづかに射らし。しんと靜まつた薄暗い酒倉に幾つも幾つも並んでゐる。やがて重々しい人の足音。酒造りの酒ごの工きでの酒がり造酒。

合を見に來たのだ。やがて舌の上に躍るワインこゝつれさ釀にか靜でゝこはンイワる。ハンガリヤは葡萄酒の名產地である。產地は西部のバラトン湖附近にあるトスペダブ。名有名である。ハンガリヤは葡萄酒の產地名有名である。酒倉のキーオフダブ近に

豚ふとる悦び　父と母とそして子供達の家族は、農業に精を出す。子供達は、豚の世話をしながら、豚の成長を待ち、肥えた豚を見て、日一日と、豚の成長を喜ぶ。豚は、人間の食物を食べて、肥えて、人間の食物となる。豚は、人間の食物を食べて、肥えて、人間の食物となる。豚は、人間の食物を食べて、肥えて、人間の食物となる

ハンガリヤン・ダンス　樂しい村の休日。著かつたハンガリヤの村がちた年青と嬪村のヤリガンハたつざか著。日休の村いし樂

う猫が子り踊。たう猫ぞたう猫」。る上きでがか組幾の女男い若てつまきが手相ち忽てしそ。るけかめつに場廣の村がちた年青と嬪村のヤリガンハたつざか著。日休の村いし樂

。だのく拔り踊を日半いし樂てしそ。るれ忘もとこの事仕いし忙。るれ忘をさしは類の世浮のてべすてれつにる入に境佳がり踊。るめじはり踊てしと々嬉は等れ牧てがヤにうやる見をりどを盆の本日ふい「と。た

國會議會事堂　ドナウ河に面したる國會議會事堂は大建築にして人ハンガリヤの誇自慢の一つ種々の建築と共に郵便切手の圖案となつてゐる。建築は一八八三年より約二十年間かゝつて建てられたもの。後期ゴシック式のものでその外郭にはレヴィヤスー世及びマチヤス・コルヴィヌス王の像を中心に國王・勇將及び大政治家等の像が九十も立つてゐる。寫眞はブダの王宮庭園より撮したもので左方にモルギット島と橋が見える。

葡萄のみのり　ハンガリヤにはにヤリガンハ歌の酒が歌い多が。そのーつ「憂さもあれはもよ。悩みもあげ逃ぬ。酒に喉を濡てし節面白く歌へよ酒。酒よ。酒飲まぬもの誰かハ酒飲みて健ヤかにしぬりなにべし。酒のし。酒の。酒と人ヤリガンハ稲はと「きべす行てつ少く年秋を擔をのみるあるる。酒は足の達

一〇、ハンガリヤ

國民的特性

西歐の東洋人種

ハンガリヤは人も知るマジャールの國、このマジャール人はわれわれと血緣あるウラルアルタイ語族であつて、インドゲルマン族の主宰する歐洲の天地に、フィンランド人及びトルコ人と共に僅にわが東洋人種を代表する民族の一である。しかるに運命の皮肉か過去千年の歷史の間に、かれ等は全く西歐の文化圈の中に吸收せられて、自ら西歐の文明民族の一であることを最も誇りとしてゐる。西歐の恐怖たる半月旗の禍、トルコ人の來襲の前に、常に西歐防禦の第一線に立つたのはかれ等であつた。かれ等の上流知識階級は、嘗てはラテン語をその日常語として使用した。現在でもかれ等はその子弟に好んで英語を學習させる。西歐文豪の記念祭を盛大に擧行する。一言にしていへば、かれ等はあらゆる機會に西歐文明國民の一員として、自己を證明しようとする。世人は往往誤まつて、かれ等を匈奴(フン族)の末裔と考へてゐる。匈奴は第五世紀の中葉、當時のガリヤ、今のフランスまで侵入して猛威を逞しくした。しかし王アッティーラの死後間もなくその王國は瓦解霧散してしまつた。しかるに、第十世紀に、蒙古族は再び津波のやうに襲來して、現今の南獨ババリヤまで侵入し、そこで敗退してドナウ、タイス南河の中間の平原に落つき、國を立てた。これが卽ち今日のマジャールの祖先である。このハンガリヤ第一期の蒙古王朝、アルパド王家はその後四世紀の間繼續するが、そのうち使徒王、ステファン第一世、謂はゆる聖ステファンの世にキリス

メゼコヴェスト の娘さん　ハンガリヤの女の最も好む色はかの女の心の美しさのやうな純白である。しかし濃厚な色も勿論使ふ。相撲取りの化粧廻しのやうな立派な前掛けをする。これは娘さんが草花や葉を自ら圖案化して刺繍を施した美しい唐草模様が浮出てゐる。

ト教に改宗して西歐諸國の仲間入をし、第十四世紀の末には、國王シギスムンド（リュクザンブール家出）がドイツ皇帝として西歐諸民族に號令するに至つた。がハンガリヤが歐洲の强國として隆盛の最頂點に達したのは、第十五世紀のマティヤス王の時であらう。かれの父、攝政フニヤーディはトルコ軍の侵入を禦いで國を救つた英雄、その子マティヤス・コルヴィヌス王となるや、文藝を奬勵しその圖書館は藏書一萬卷を越え、二つの大學と數々の學校が建設せられた。西歐文化の華文藝復興がかうしてこの國にも爛漫として花開いたのであつた。しかしマティヤス正義王の崩じた後は再び內亂外寇に國運衰へて、遂には國の大部分は約一世紀もトルコの壓政下に呻吟するの憂目に逢ひ、その他の部分はオーストリヤのハプスブルグ家の併合するところとなつた。

忠義と反抗の矛盾せる國民

一七四一年オーストリヤ女帝マリヤ・テレジヤは、プレッスブルグの孤城にその一子を膝に、悄然としてハンガリヤ貴族の助力を懇願した。年いまだ二十三歳の若く美はしい女帝は、外は列强の圍みに逢ひ國危く、內はウィーン市民の不忠な冷淡に身をおくところもなく、この孤城に逃れてゐたのであつた。東洋人の俠勇に燃えるハンガリヤ貴族にとつては、歐洲列强を敵とするといふ危險事業も、かれ等の懷に入つた窮鳥の懇願の前には何でもなかつた。生命と血、われ等の王マリヤ・テレジヤのため

横町でばたつたりたつ

中のヤリガンハく行へ場市「ずら變相よめだ」「うどは氣景。んさみかおらあ」
。ろゐてつ合話ずら殘でま合出の道水らかとこの長成の娘。話立てつ逢出りたつばで來往。んさ嬰